

森田草平

『三十四郎』の思出

『三四郎』の思出

『三四郎』はかわいい作品である。先生の作中での傑作とは云われないかも知らんが、私ども先生の門下に集まった連中にとって、まことに思出の深い作品である。

それは私どもが初めて先生の千駄木のお宅へ伺った、明治三十七八年から九年頃の先生の生活、周囲の雰囲気と
いうようなものがその儘出ているからに外ならない。と云って、作中の広田先生は固より先生自身ではない。第一、先生は広田先生のように独身者ではなかった。三四

郎にしてからが、あの発端にある名古屋の宿屋の一夜の挿詰は、三四郎を以て擬せられている男のそれではなく、別の仲間の一人の冒険であつたと云われる。つまり先生という人は、他人のことを書かれるにしても、その人の性格なり閱歴なりの全体を取つて来て、その儘描き出すと云うようなことは決してされなかつた。甲と乙とを掻きまぜて、結局誰を取つたとも云われぬようにして置くだけの用意は常に払われた。だから、三四郎を以て任ずる志望者が幾人も出て来る始末である。が、その中にも、私どもから見れば、自然誰だろう、誰に一ばんよく似て

いるだろう位の見当はつく。与次郎を以て擬せられている男なぞも、おれは先生が大学を去られる時にも留守運動なぞはしなかった、そんな下らない事するかいと云つて、よく怒つて見せるけれども、なに、都合の好い方面だけ挙げれば、喜んで与次郎を以て任ずるのである。但し断つて置きますが、私は『三四郎』の中のどの人物でもない。ただ一度与次郎が広田先生を引張つて、借家捜しに出掛けるところがある。あれは先生が西片町の家を立ち退かれる時、適当な家がないのに困つていられるのを見て、千駄ヶ谷の方面へお供をしたことがある。その

時分の千駄ヶ谷は今のように入が立て込んでいないで、藪の陰の細径づたいに、或植木屋の持っている平家で、

『石の門』のある新築の家に案内した。新築で可なり広くはあったが、薄手の安普請で一向先生のお気に召さなかった。その帰りがけに、大分こちらへ来てから、『どうも新任の陸軍少将でも住みそうな家ですね』と云ったら、先生は笑っていられた。それが形を変えて、あの中に採用されている位のもので、その外には一向関係がない。

つまりその頃の私は、先生のお宅へ上っても、どっち

かと云えば舎羞はにかんで大人おとなしかった方で、大人しくない連中が多くあの中に捕まっているのである。しかしそれに就いては、その当事者が自分で云ったらいいから、私は黙って置く。

そう云う訳で、この作の中へ出て来る男の人物は大抵見当がつくが、女性、殊に女主人公の美禰子に到っては丸で分らない。『猫』の中の苦沙弥先生の細君は、頭の真中に円い禿のあるのが動かし難い証拠となつて、すぐに見当がつく。『それから』の中の嫂の梅子は、天狗の占師に並々ならぬ信仰を持っていられるばかりでなく、

代助が借金に行く時なぞ、『あなた、本当に返す気なの？』と、頭からつけつけ云われる口調から見ても、今の未亡人だと云うことは、大抵あたりが着く。（と云つて、私がそう度々未亡人の許へ借金に行つた訳ではない。一番多くねだりに行つた男は別にある。）しかし美禰子に到つては、先生の周囲に集まつた女性を見渡しても、殆ど見当が附かない。強いて云えば、（これはまあ一寸座興に云うのであるし、座興としても、私一個の興味になると、甚だ失礼しますが）あの自意識の強い、真面目なのか、男を翻弄しているのか、一寸捕まえ所のない近

代振りの女性としては、私の『煤煙』の女主人公を挙げることが出来る。尤も、私の作は『三四郎』の直後に出たものであるし、先生は『煤煙』の女主人公を直接知ってはいられた。ただ私の話を通じて知っていられたばかりである。その話を通じて知られた『煤煙』の女主人公が先生の創作心を動かして、ここに美禰子となって現われたのではあるまいか。私はまあ一寸そう考えて見た。処が、実はそうでないのである。先生は美禰子のような捕まえ所のない女を既に前に『草枕』の中で書いていられた。あの若い禪坊さんを遺っつけた『なかなか

く機鋒の鋭い女』がそれだ。私はそれに興味を持って、知らず識らず深い感銘を受けていたものと見えて、その印象をすっかり『煤煙』の女主人公に押しつけて、先方が如何なる婦人であるかということにも少しも頓着なく、あの作の中に書いたような女主人公を作り上げてしまった。つまり『草枕』の女主人公を見るような眼で先方の婦人を眺めていたのである。或いは、もつと突き込んで云えば、先方の婦人自ら『草枕』の女主人公を以て任じていたかも知れない。しかしそれは私の請け合う限りではない。兎に角、これを以てこれを見れば、先生が

美禰子の着想を『煤煙』の女主人公から得られたのでなく、『煤煙』の女主人公の方が先生から着想を得たのである。真似したと云えば、私の方が真似をしたのである。

では、美禰子の前身たる『草枕』の女主人公は、一体先生は何処から得て来られたか。これは私にも分らない。

云わば、先生の頭脳から生れたオリジナル・キヤラクター独創的オリジナル・キヤラクター性格である。先

生もこの性格には余程興味があつたと見えて、美禰子の後には、『彼岸過迄』の中の『須永の話』の千代子を書いていられる。私は千代子を矢張り美禰子の後身、少なくとも同人型の女性と見ているものである。『草枕』の

女主人公よりも、美禰子の方が余程人間らしくなっているが、千代子になると、美禰子よりも更に一段人間化されて、正宗白鳥氏も云っていられるように、先生の描かれた幾多の女性中でも、一番生きて女になっている。一体、先生の描かれる女は、きびきびして、直覚的で、言葉でも極めて歯切れが良い。それは『猫』の細君から始まって、『明暗』のお信に到るまで。悉くそうである。この拗って来る所は、私なぞにも大抵分るような気がする。トルストイは『アンナ・カレニナ』の中であつたと思つた、『ただ一人の女のみを知つて、一生その女ばかり

りを観察して来たものは、万人の異性を知った男よりも、却てよく女性というものを知っている』と云うような意味のことを云っていた。私は先生に於て、トルストイのこの言葉の吾人を欺かざるをつくづく見るものである。

日本文学電子図書館

『三四郎』の思出

著 者：森田草平

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館